

キルギスの日本語教育事情

ヴォロビヨワ・ガリーナ¹

一般事情

キルギス共和国は旧ソ連の国で、中央アジアにあり、中国の西北、タジキスタンの北、ウズベキスタンの東、カザフスタンの南に位置している。人口は約530万人で、キルギス人・ウズベク人・ロシア人・カザフ人・ドイツ人・タタール人・ドゥンガン人など、およそ80の民族がいる。面積は約20万平方キロメートルで、日本の半分ぐらいの広さである。首都はビシケク市である。国語としてはキルギス語、公用言語としてはロシア語が法律で定められている。

キルギス共和国は1991年にソ連から独立し、92年には日本と外交関係を結んでいる。2003年に在キルギス共和国日本国大使館が開かれ、2004年には在日本国キルギス共和国大使館が開かれた。キルギス共和国は日本のODA対象国であり、日本からさまざまな援助を受けている。キルギス国民は第二次世界大戦後の日本の経済発展、現在の日本の科学技術・工業技術および日本文化に高い関心を持ち、日本人に対して親近感を抱いている。

教育制度

キルギスの教育制度はソ連時代に構築された。普通教育・中等専門教育・高等教育(大学・高等専門学校と科学研究機関でなされる大学院生の教育を含む)、就学前教育・職業技術教育を含む。初等・中等・高等教育機関のほとんどが教育省の管轄下にある。初等・中等教育は一貫教育で11年制である。義務教育は9年間である。専門学校とカレッジには、中等教育機関での9年生を終えて

1 元キルギス共和国日本人材開発センター日本語講座主任、現キルギス民族大学上級講師。

から進学し、そこでさらに3年間勉強する。

高等教育機関に当たるものとして大学やアカデミーがあり、5年制と4、6年制の2種類の制度がある。専門家資格教育は従来通りの5年制である。学校は、規定に基づいて専門家資格教育の全課程を実施し、試験に合格した学生に「高等教育卒業証明」を与え、同時に「技師」や「数学者」などの専門家の資格を授与する。

キルギス国立教育機関は、2006年9月以降、5年制から4年制に変わった。一般教養課程2年、専門教育課程2年の計4年で学士学位を取得する。その後、修士課程（2年間）で修士学位が取得できる。

キルギス系住民は大抵キルギス語、ロシア系などの住民はロシア語を使用しているが、ソ連時代のロシア語教育の影響で、公共機関においてはロシア語の使用が頻繁である。多くの初等・中等学校では英語教育が行われ、次いでドイツ語・フランス語などが学習されている。日本語教育を行っている中学校は4校である。高等教育機関では英語をはじめ、中国語・トルコ語・ドイツ語・フランス語・日本語・アラビア語・ペルシア語が教えられ、日本語教育を行っている機関は11校である。

日本語教育

ソ連時代のキルギスには日本語教育が存在せず、希望者はロシア連邦の教育機関で日本語の勉強をしていた。矢沢によれば、ロシアの日本語教育は18世紀初頭に遡る長い歴史を持っている。モスクワ国立総合大学付属アジア・アフリカ諸国大学、サンクト・ペテルブルグ国立総合大学、極東国立総合大学などの30以上の教育機関で日本語を教えている²。しかしソ連時代のキルギスには日本語のできる者は一人しかいなかった。ロシアのウラジオストックに位置する極東国立総合大学の卒業生だった。

キルギスの独立後間もない1991年に、キルギス国立民族大学（現在のキルギス民族大学）東洋学部に日本語学科（日本語主専攻）が開設され、日本語教

2 矢沢理子「ロシアの日本語教育事情——その伝統的授業理論と現在の動向をめぐって」『日本語教育学会秋季大会予稿集』京都外国語大学、1996年10月5日・6日、124-129頁。

育がスタートした。現在、同大学国際関係学部、歴史学部、ジャーナリズム学部では日本語を第二外国語として、コンピューター技術・インターネット学部では日本語を選択科目として教えている。

1992年から2000年にかけて首都ビシケクにおいては、国立ビシケク人文大学国際関係東洋学部（日本語主専攻）、キルギス国立教育大学（現在のキルギス国立大学）東洋国際関係学部東洋言語学科（日本語は必修の第一外国語）、キルギス・ロシアスラブ大学（日本語は第二外国語）、キルギス・アメリカ大学（現在の中央アジア・アメリカ大学、日本語は第二外国語）、ビジネス観光大学（日本語は第二外国語）、チュイ地方大学（日本語は第二外国語）、建築大学（日本語は選択科目）、外交アカデミー（日本語は選択科目）で日本語教育が始まった。

1999年からは地方にあるオッシュ国立大学とジャララバード国立大学で、2004年からはカラコル国立大学でも日本語教育が始まった。キルギスの大学の多くの学部で日本語コースが開設されるようになり、日本語教育機関が年々増えていった。

また1991年には、第一寄宿学校（11年制）で日本語の授業が始まり、初等・中等教育機関での日本語教育がスタートした。1999年からは、キルギス国立教育大学附属リツェイでも教えられている。また、キルギス民族大学附属東洋リツェイとビシケク人文大学附属人文リツェイでも日本語教育が行われ、近年、地方の中等学校でも JICA 青年海外協力隊員によって日本語が教えられている。その他、両国政府の合意により、キルギス日本センターが1995年に設立され、主に社会人を対象に日本語教育を行っているが、2003年4月からは JICA の管轄下のキルギス共和国日本人材開発センターになった。

2009年に国際交流基金が行った調査によると、キルギスでは16の教育機関で日本語を教えていた。そのうち、高等教育機関11、初等・中等教育機関4、学校教育以外の機関が1であった³。2000年から2006年まで、キルギスの日本語教師と学習者は日本語能力試験を受けるためにカザフスタンのアルマトゥイへ行く必要があった。2007年にはキルギスで第1回日本語能力試験が実施された。

3 国際交流基金『2009年海外日本語教育機関調査』。<http://www.jpj.go.jp/j/japanese/survey/country/2010/kyrgyz.html>

日本語教師

日本語教師の人数は2009年現在で46名、そのうち高等教育機関の教師が38名、中等教育機関の教師が7名、学校教育以外の機関の教師が1名だった⁴。そのうち日本人教師は約30%であった。現地人教師は、キルギスの大学の日本語専攻の卒業生が中心で、20代の若手教師が多い。教授法などの専門教育を受けておらず、手探り状態で日本語を教えている場合が多い。しかし、国際交流基金日本語国際センターの長・短期教師研修に参加して教授法を学んだ教師も徐々に増えてきている。また、これまで、キルギス日本語教師会主催で2005年から2006年にかけて、そして2008年にも日本語教師養成コースが設けられた。2009年には、キルギス日本センターで日本語教師研修コースが実施された。日本人教師として、国際交流基金からキルギス日本人材開発センターに派遣されている日本語教育専門家が1名、JICAの青年海外協力隊員が2名いる。そのほかに、現地機関との契約で教えている者もいる。最低限必要な資格は学士の学位である。

キルギス日本語教師会は1999年から正式に活動を開始した。キルギスにおける日本語教育の発展を図ることを目的とし、日本語教育に関する情報交換や日本語教師の相互協力の場となっている。教師会の主な活動は、キルギスおよび中央アジア日本語弁論大会、日本語教育セミナー、作文コンクールや朗読コンテストの開催、教師会会報の発行（年に3回）、教師会のホームページの作成、公開授業の見学、教師養成コースや教授法の勉強会、教授法のセミナーなどの主催である。原則として月に1回会合を行っている。主な行事は、三つの教育機関（キルギス日本人材開発センター・国立ビシケク人文大学・キルギス民族大学）の日本語教師が実行委員として企画・運営している。2008年より「チュルク諸国日本語教育セミナー」（アゼルバイジャン・ウズベキスタン・カザフスタン・キルギス・トルクメニスタン・トルコ）が開催され、チュルク諸語と日本語の類似性を生かした日本語教育に関する研究がなされている。

4 同上。

日本語学習者

国際交流基金によると2009年現在、キルギスの日本語学習者の数は713名に達した。そのうち大学生は478名、中等教育機関の学生は195名、学校教育以外の機関の学習者は40名だった。2006年からの変化を見ると、機関数は14から16に増加したものの、学習者数は1064名から713名に減少した。その要因として、高等教育で隣国の中国語を学ぶ学生の増加が考えられる。また、日本語の知識を生かせる就職先がキルギスでは非常に限られていることも理由として考えられる⁵。

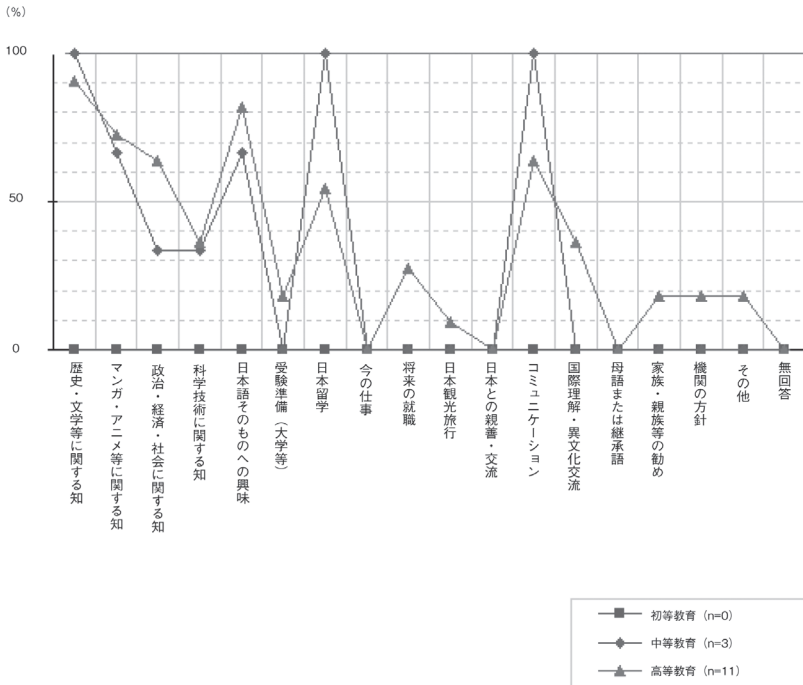


図1 中学生、大学生の学習動機（国際交流基金作成）

5 同上。

日本語学習の目的は、大学生の場合、卒業後に日本の大学や大学院に入学して学習を続ける、あるいは日本の会社で働く、旅行会社のガイドになるため、などである。また、社会人の場合は、仕事で日本語の知識を必要とする、日本語を学んでキルギスに役に立つ活動を始めるため、などである。将来日本語を生かした仕事に就きたいと考えている学習者もいるが、可能性はかなり限られている。

国際交流基金によると、日本語学習者の学習動機として、「日本留学」「日本人とのコミュニケーション」「日本の歴史・文学等に対する興味・関心」「日本語そのものへの興味」などが挙げられている(図1)。学校以外の学習者の場合、「家族・親族等の勧め」という動機もある(図2)。

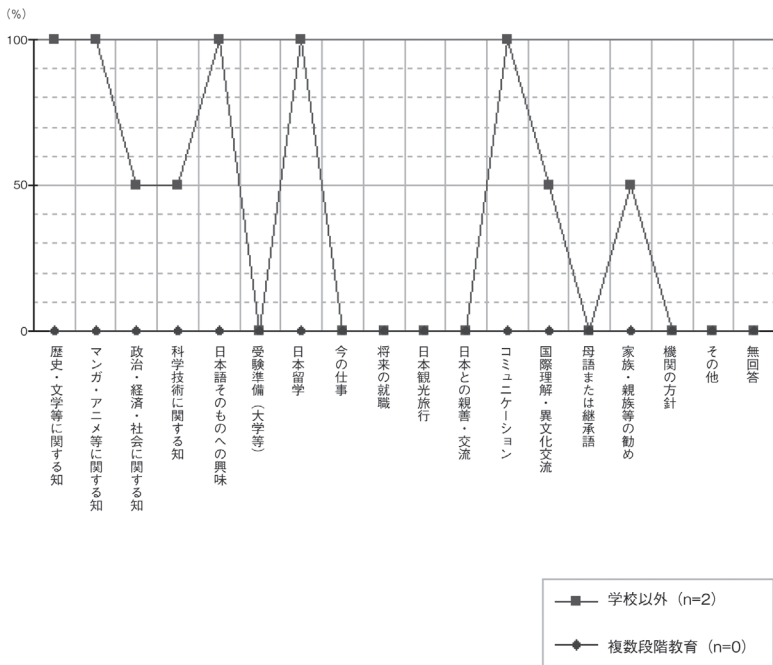


図2 学校以外の学習者の学習動機 (国際交流基金作成)

キルギス共和国では日本語教育機関が増え、1991年からめざましい発展を遂げたが、さまざまな問題がある。主な問題点は下記の通りである。

- ・日本語教師を育てる国内制度がない
- ・日本語教材が不足している
- ・設備不足で日本語教育環境が整っていない
- ・卒業生が日本語の知識を生かせる仕事が非常に少ない

教師としての経験から見れば、学習者が日本語を習得する際の最大の困難は漢字学習である。キルギス語の文法は日本語の文法と似ていて、キルギス人にとって日本語の文法は習得しやすい。聴解も日本語の発音も問題にならない。しかし、漢字教育はキリル文字とローマ字に慣れている非漢字圏のキルギス人にとっては難題である。

教材

キルギスの日本語教育では、主に日本で出版された日本語教材が使用されている。中等教育では『新日本語の基礎Ⅰ、Ⅱ』（海外技術者研修協会、1990・1993）、『みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ』（スリーエーネットワーク、1998）、『日本語初歩』（鈴木・川瀬、1985）などが使用されている。

高等教育では、『みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ』『文化中級日本語Ⅰ、Ⅱ』（文化外国語専門学校、2004）がよく使用されている。学校教育以外の機関であるキルギス日本人材開発センターにおいては、テキストとして『みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ』『中級へ行こう 日本語の文型と表現 59』（平井・三輪、スリーエーネットワーク、2004）、『ニューアプローチ中級日本語〔基礎編〕』（小柳、語文研究社、2002）、『ニューアプローチ中上級日本語』（小柳、語文研究社、2002）などが使用されている。キルギス民族大学では、コンピュータ技術・インターネット学部で日本語学習用のコンピュータソフトを使って平仮名・片仮名・漢字を学ぶ授業が行われている。

漢字教材として、初級では『みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ漢字』（新矢ら、スリーエーネットワーク、2000・2001）、『BASIC KANJI BOOK Vol. 1, 2』（加納ら、凡人社、1989）、中・上級では、『KANJI IN CONTEXT』（西口ら、ジャパン

タイムズ、1994/2004) などが使用されている (図3)。また、初級の漢字教材としては、キルギス共和国教育科学青年政策省の推薦を得ている筆者の著作『漢字物語Ⅰ、Ⅱ』も使用されている⁶。



図3 キルギスで使用されている漢字教材

キルギスの漢字教育を考えると、教室内での漢字指導には、通常の文法や会話の授業をする中で短い時間が充てられているという状況である。ジャマクロヴァは、2006年にキルギス民族大学の60人の学生を対象に漢字学習ストラテジーと学習スタイルに関する予備調査を行った。その結果を見ると、漢字学習上の最大の困難は「一つの漢字に読み方がいくつもある」(漢字の読み方の多様性)で、次は「学習しても忘れる」(記憶保持性)、それから学習対象漢字の量や字形の多様性と複雑性に関する「漢字の数が多い」「字形が複雑」「似通った漢字が多い」という困難が明らかになった。学習スタイルに関する調査結果からは、キルギスの日本語学習者は主に「何度も書いて練習する」というスタイルをとっていることが明らかになった⁷。

筆者が2010年に30名の1年生を対象に国立ビシケク人文大学で行った調査からは、初級の学生は主に「漢字を何回も書く」「熟語を何回も書く」「カード

6 ヴォロビヨワ・ガリーナ『漢字物語Ⅰ』ビシケク、2005/2007年、ヴォロビヨワ・ヴィクトル/ヴォロビヨワ・ガリーナ『漢字物語Ⅱ』ビシケク、2007年。

7 ジャマクロヴァ・ウルジャン・カヴァソヴァ『非漢字圏初級日本語学習者を対象とした漢字指導法を考える——キルギスの日本語学習者の漢字学習ストラテジーと学習スタイル調査の結果に基づいて』修士論文、早稲田大学大学院日本語教育研究科、08A14、2008年3月、1-117頁。

を作って漢字を覚える」という学習法を採用していることが明らかになった。つまり、漢字指導では、主に漢字と熟語を繰り返し書くことや、丸暗記などの定着・確認型の機械的な練習が推奨されている。

漢字学習は丸暗記に頼る無味乾燥なものになってしまいがちであるが、漢字の形・音・意味・語構造・文脈での使用法などを教えるにあたっては練習プログラムを用意し、楽しく学べるよう工夫することが大切である。そのためには、キルギスの教師が使える効率的な漢字指導法や漢字を覚えやすくする漢字教材の開発が欠かせないと思う。これは私のこれからの課題でもある。